

笠子氏 下は皆御号の如し。

午後六時半終り。

一方爭議團に於ては午後一時より大玉座に於て大政本會を以て本日の應援  
團の煽動より社会並に官憲に激怒を蒙りて本會の激怒を以て本日の應援  
の必要を説き或は各地より激怒電報等を前讀し終りし時本會は本會の忠臣  
を以て解散せり。聴衆七百余名全政本會の激怒を以て本日の應援を以て  
本日彼等解雇通知を受けたる者は一括送還し來り本日の護士ル若井 布施

辰治の一名を法律顧問として平島を諸の等稱し居り。

他方所の打撃は益々甚大にして此後して程程克が土生、三庄河を初り因島の盛衰  
の関する事大なるを以て本日岸土生三庄河所有土生所役處の集會し爭議の對する  
會議を開き

自午後五時十分より土生所民代表として阪元嘉惣次氏、小林勝三郎氏、村上嘉花正門氏  
川直元吉氏、久下島多郎氏、赤岡義一氏、木村市太郎氏、藤原藤次氏、松崎清風氏

等工場幹部と會見し所の立場を述べ以て解決の旨も早きを希望せり。

抄書 (寫多数の内部代表的)

拝啓 貴下御清福之候奉賀云 陳者此度貴工場の爭議を機として總同盟を  
根絶せし被下度彼等無頼の徒が因島の労働者を悪化させ 終るは因島の下級青  
年は眞の悪思想に陥ります、何卒因島全体を爲め犠牲となり被下度因島の  
民人は貴下の御恩を蒙ります、因島人と雖も同盟真、悪化具する者はいすく  
解雇是が非下も眞面目に働かぬは下らぬ様了貴下の時代御改革の程一重に御  
願申上ります。

私に因島生れの労働者であります、労働爭議は日本帝國を亡します。

大正十三年五月二十五日

労働者の一人

場長殿

二十六日

土生爭議團は三庄爭議團の開催する演説會應援の目的を以て午前土時頃組合